ハズレポーションが醤油だったので料理することにしました

「試し読み版」

富士とまと
Tomato Fuji
村上ゆいち Ill.
Yuichi Murakami

ツギクルブックス

CHARACTER

主な登場人物

ローファス

難しい依頼をこなして世界を渡り歩く、S級冒険者。ユーリと同じ30歳だが「おっさん」と自称。任務や人の世話で忙しく、いまだ独身。

ユーリ

学生結婚をして10年、三十路になるまで専業主婦だった異世界転移者。逆境でも優しさやユーモアを失わず、ひたむきに頑張る性格の持ち主。

カーツ
孤児院で育ち、ローファスに憧れて冒険者の修行をする少年。運動神経がよく、ユーリを手助けしてくれる存在。
キリカ
父親の虐待から逃れるため、ポーション畑で働きながら冒険者を目指す少女。ユーリと出会い、自立心に目覚めていく。
ブライス
ポーション畑で働く子供たちのリーダー。天賦の魔法力を持つ美少年だが、エルフ族の血が流れるため、実年齢は28歳。

ハズレポーションが醤油だったので料理することにしました

富士とまと

イラスト
村上ゆいち

プロローグ

学生結婚だった。

結婚1年目。

「優莉(ゆうり)ちゃんには専業主婦になってほしい！　就職しなくていいよ。ご飯を作って、僕の帰りを待っていてほしいんだ」

結婚2年目。

「ごめん。今日は、外で食べて帰る」

結婚3年目。

「仕事が忙しいんだ。仕事優先。子供？　まだ若いんだから、そのうちな」

結婚4年目。

「会社の部下の子供なんだけど……、少し預かってくれないか？」

結婚5年目。

「保育園に入れなかったみたいなんだ。彼女に協力してあげてくれ」

結婚6年目。
「子供？　ああ、そのうちな。今は、彼女の子供たちの世話で忙しいだろう？」
結婚7年目。
「どうせお前は専業主婦で、暇だろ？　彼女はシングルマザーで頑張っているんだぞ」
結婚8年目。
「働きたい？　今まで働いたこともないお前に、何ができるわけ？」
結婚9年目。
「彼女に子供ができた！　だから、離婚してくれ。はぁ？　慰謝料？　10年近く家でのんびり、俺の稼ぎで暮らしてきたくせに？　冗談じゃないよ」

……、ブチッ‼

「私だって、働いて、自分で生活できるわよっ！　見てなさい！　離婚？　慰謝料なんてもらわなくても、1人で生活できるようになったら判を押してあげるわよっ！　慰謝料は払わないって言ったのは、あなたの方なんですからね！」
啖呵（たんか）を切って、そのままハローワークに駆け込んだ。

「すいませんっ、仕事を紹介してください！」

「はい、いらっしゃいませ。『冒険者ギルド・西ヘルナ支部』へようこそ」

え??

1章　異世界生活1日目「職探し」

ギ、ギルド？　今、冒険者ギルドって聞こえたんだけど……。
最近のハローワークって、若者向けに、ゲームっぽくしてるの？
「登録証を見せていただけますか？」
へ？
「あ、あの、私、仕事を探すのは初めてで、登録とかしていなくて……」
マンションを飛び出して、ハローワークに駆け込んだはず。今、私の目の前にあるのは、まるでゲームの中に入り込んでしまったかのような、木と石の質感漂うカウンター。
カウンターの中の女性は、髪が黄色くて彫りの深い、西洋風の顔立ちをした美女だ。
「では、カードもお持ちではありませんね？」
「は？　カード？」
何の？　クレジットカードもキャッシュカードも、私の名前で作ったカードは何一つ持っていない。
私……。一体この10年、何をしていたのだろう。

料理の腕を磨いて、主人の浮気相手の子供の面倒を見て……。
ああ……、子供たちは元気かな。そう。あの子たちに、罪はないもの。
あの子たちには、幸せになって欲しい。離婚かぁ……。
うん！　早く自立して、あの子たちのためにも、判を押さなくちゃ。そのためには、仕事！
「では、カードを作りますので、ステータスの開示をお願いできますか？」
ステータスの開示？　何それ。ステータスって、地位とか身分って意味だよね。あ、履歴書を見せろっていうこと？　持ってきてないよ……。
戸惑う私に、カウンターの女性がにっこりと微笑んだ。
「あ、大丈夫ですよ。我々ギルド職員には個人情報の守秘義務があって、魔法の拘束もかかっています。ですから、あなたのステータスを漏らすことは絶対にありません」
魔法？
「では、こちらの紙に手を乗せてから、『ステータスオープン』と言ってくださいね？」
今の就活って、こうなってるの？　主人に「世間知らず」だと繰り返し叱られたけど、本当だったかもしれない。10年前、学生の頃に就活で訪ねたハローワークはこうじゃなかった。
「えっと……、ステータスオープン！」
目を白黒させながらも、言われるままに紙の上に手を置いて言うと、半透明の画面が空中に

出現した。画面には文字や数字が書かれていて、それがそのまま、手元の紙に表示された。
すごい！　何これ。魔法みたい。
「あっ」
受付の女性が、小さく声を上げた。
「あーあ、こりゃひでぇな。5歳の子供並みじゃないか」
女性の後ろから、ものすごく背が高くてがっしりした30歳前後の男が現れた。
男は、私の手元の紙を覗き込むと、残念な子を見るような目で私を見た。
「これで仕事する……っつっても、紹介できる仕事なんてなんにもないぞ？」
「え、でも、私、困りますっ！　どうしても仕事をしないと」
「んー、嬢ちゃんな、どうしても仕事したいなら、冒険者ギルドじゃなくて、商業ギルドで仕事を探しな。言葉遣いや立ち居振る舞いはちゃんとしてるようだから、そこそこのお屋敷での仕事が見つかるだろうよ」
嬢ちゃん？　そんな年齢じゃないんだけど。もう三十路（みそじ）なんだけどな。ステータスっていうものが「5歳児並み」って、馬鹿にされてる？
「お屋敷の仕事？」
「ん、ああ。掃除したり、洗濯したり、料理ができるなら料理をしたりな」

掃除、洗濯、料理……。

「いやです」

思わず声が出た。

10年間、主人のために、掃除も洗濯も料理も、ずっとずっと頑張ってやってきた。だけど、そんなのは仕事でもなんでもない、って、家で楽してただけだ、って嘲笑われた。

もし、お屋敷で家事をして、給料をもらって自立できても、きっと主人はこう言うんだろう。

「結局、お前にはそれしかできねーんだ」って。

「私、もっと違う仕事がしたいんですっ！」

悔しい。掃除だって洗濯だって料理だって、プロの家政婦さんに負けないくらい頑張っていた。家事だって、立派な労働だ。

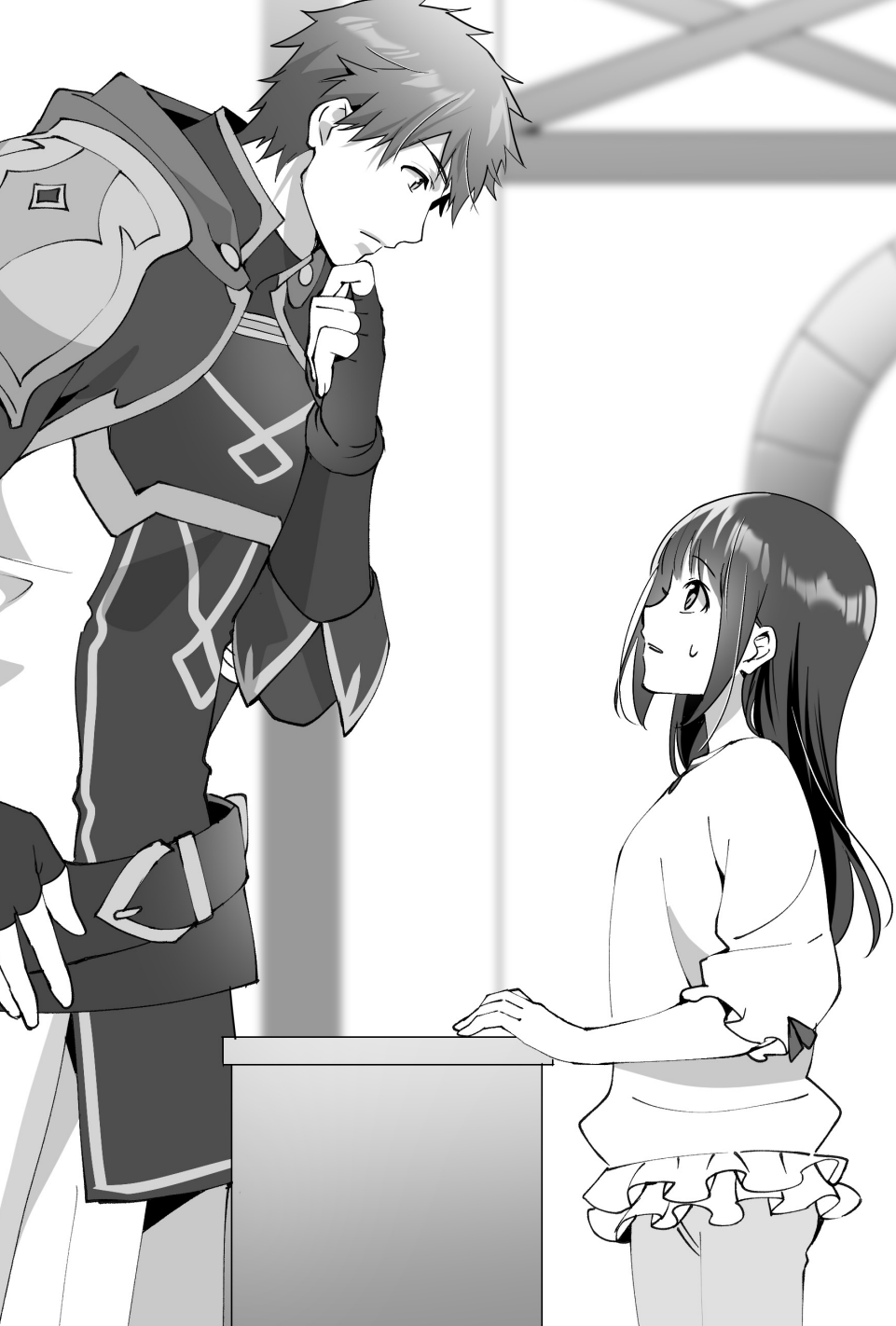
でも、主人はきっと、「〝彼女〟は仕事も家事も両立していた、家事しかしてないお前とは違うんだ」……って、そう言うんだろう。

「うーん、どうしても冒険者になりたいってやつは多いけどなぁ……。どうすっかなぁ」

へ？　冒険者？

「しゃあない。5歳の子供でもできる仕事なら紹介してやる。そこでコツコツ働いてレベルを上げることだ。レベルさえ上がれば、別の仕事も紹介できるからな」

「あ、ありがとうございます！」
「じゃぁ、ついてこい。ちょうどポーション畑に行くところだったんだ。連れてってやる」
ポーション畑？　畑仕事ってこと？　うん、それなら頑張れば私にもできそうだ。ミミズやカメムシくらいなら平気だし。蛇が出てきたら、腰を抜かすかもしれないけど……。
腰の高さほどもあるカウンターに手をついて軽く飛び越え、男の人はこちら側に立った。
あらためて見ると、すごい服装だ。茶系のシャツとズボンとブーツ。それに、革の胸当て。鎧（よろい）の肩当てから、マントがひらめいている。腰のベルトには、剣が……。ゲーム風の世界観を演出するためのコスプレ？
ハローワークの職員さんも大変だな……っていうか、よくこんな西洋顔で筋肉もりもりの、ゲームのキャラクターみたいな人材が都合よくいましたね？
「もう、ローファスさんっ！　勝手に仕事、紹介しないでくださいよっ」
「問題ないだろう？　俺が責任持つからな」
ローファスさんって名前なんだ。
「もうっ。S級冒険者だからって、勝手しすぎですっ！　ユーリさんの個人情報も覗き見しちゃうしっ！　知りませんよ、ギルド長に叱られてもっ！」



ぷんすかと怒りながら、カウンターの女性は、小さな銅色のカードをローファスさんに投げた。ローファスさんは、パシン、と投げつけられたカードを受け取ると、シャツの襟元を留めていた紐を抜き取った。カードに紐を通し、私の正面に立つ。

「ほら、これで嬢ちゃんも冒険者だ。まぁ、レベルが10になるまでは見習いだけどな」

ニッと笑って、紐を通して結んだカードを、私の首にかけてくれた。

大きなローファスさんの手が少し髪に触れる。

ドキンと心臓が跳ねた。

まだ離婚が成立していない既婚者なのに……こうしてネックレス……まぁちょっと違うけど……を首にかけてもらっただけでドキドキするなんて。ちょっと自分が可笑しかった。

「ほらっ、笑ってる場合じゃない。失くさないように、さっさと服の中に入れておけ！」

ローファスさんがカードを摘み上げ、カットソーの襟元を掴んだ。

「きゃっ、な、な、な、……何するのよっ！」

私よりも頭2つ分高い目線から、カットソーの襟元を引っ張られたら、中、見えるよね？

セっ、セクハラっ！

「あ、すまん、いや、悪かった。いや、その……」

ぎっと顔を赤くして睨みつけると、ローファスさんの顔は、私以上に真っ赤になっていた。

ん？「セクハラ確信犯」とは、感じが違う？

「ローファスさん、ユーリさんを、ポーション畑の子供たちと同じに扱わないでくださいっ。ごめんなさい、ユーリさん。面倒見のいい人なんだけど、世話好きすぎるのが玉に瑕で……」

子供扱い？　いや、ちょっと待って。私、三十路なんですけど。そういえば、嬢ちゃんって呼んでたのは……本気で「嬢ちゃん」っていう年齢に見られている？

そりゃ身長は１４５㎝しかなくて、童顔でノーメイクで、幼く見られることはあるけれど。日本では子供扱いされることはなかったんだけど、西洋顔の人には子供に見えるの？　そ、そりゃ、目の前の美女のようなメリハリボディじゃないけど……。

っていうか、そもそも仕事を探しに来てるのに、子供扱いされるとかって、オカシイから！

◆◇◆◇◆

ハローワークから出ると、やっと、現実が見えてきた。そんなバカな……。

ここは、家を飛び出して足を踏み入れたハローワークじゃない。ビルも、車も、全部なくなってしまっている。

今、私の周囲に広がっているのは、正真正銘、中世ヨーロッパ風の剣と魔法の「ゲーム」っ

ぽい世界だ。「ゲーム」の中なのか「異世界」なのかは分からないけど……。
1つだけ確かなことは、私の住んでいた日本じゃない。
……本当に、1人で、日本じゃないこの世界で、生きていかなくちゃいけないんだ。お金もなければ、頼る親族も友達もいない。これから紹介してもらう仕事が、私の唯一の生命線だ。
ローファスさんが、荷台付きの馬車を引いてきた。2人で御者台に並んで座る。
「あの、私に紹介してくれるっていう仕事なんですけど……どういう仕事ですか？」
「ああ、安心しろ。5歳児でもできる、簡単で安全な仕事だから」
……やけに「5歳児」を強調するけど、さすがに私、5歳児よりはもう少しマシな仕事ができると思うんですが。
「ポーション畑で、ポーションを収穫する仕事だ」
ポーションって、ゲームとかで「回復アイテム」として出てくるやつだっけ？　飲むと傷や病気が治るというもの？　まさか、畑で栽培してるとは思わなかったなぁ。
「あの……、それで給料は？」
「頑張り次第だな。ポーションを1つ収穫すれば、パンを1つ買える感じだ。実入りが少ない子でも、1日にだいたいポーション5つ。多い子なら、ポーション10個は収穫できるぞ」
えっと、ポーション1つがパン1つ？　パンって日本だと100円くらい？　頑張っても1

０００円⁉　あれ、それって生活できるの？　パンは食べられるとしても……。
「住む場所？　ああ、ポーション畑で働いている間は、小屋に寝泊まりするといい。街から畑まで歩くと半日かかるからな。みんな小屋に寝泊まりして、月に１度家に戻るような生活だ」
ほっ。当面の寝場所は、大丈夫そうだ。
「なぁ、嬢ちゃん、嬢ちゃんはどこから来たんだ？　このあたりじゃ見ない顔だろう？」
あ、……やっぱり。日本人顔は、ここでは珍しいんだ。
ギルドを出て街で見かけた人たちは皆、彫りの深い西洋風の顔つきだったもんな。
背が高い人も多い。ローファスさんに至っては、身長が２ｍくらいありそうだ。他の人を見ても、平均して男性は１８０、女性は１６５㎝くらいありそう。それで私、「嬢ちゃん」って言われてるわけかな？　日本でも若く見られてたけど、一体いくつに見えてるんだろうか。
「ローファスさんこそ、何者なんですか？」
今更だけど、全く見ず知らずの男の人についてきちゃって、私、大丈夫なんだろうか？
「ん、まぁ、ただの冒険者のおっさんさ」
おっさん？
「おいくつなんですか？」
「あー、いや、いくつだったかな、そろそろ30か、31か……」

「え？」
まさに同じ年くらい。
「いや、言いたいことは分かる。よく言われるんだ。さっさと身を固めろとな。30にもなって独り身で、婚姻の腕輪もしてないからな……」
「早く結婚したからって、いいとは限りませんよっ」
私は、世間を知らないまま学生結婚をして、後悔しかない。
幸せだった時間もあったはずなのに、今は思い出せない。
「そうだろう、そうだろう。嬢ちゃんは小さいのによく分かってる！」
ち、小さい……。
「ローファスさん、私のこと、何歳だと思ってるんですか？」
「あ、すまん。そうだった。他の子供たちと同じように扱うなって言われてたんだ。俺が思ってるよりも年上ってことだよな？」
15歳くらいか、いやひょっとして成人してるとか？　だがいくらなんでも、レベル1のステータスで、すでに成人済みだなんてあり得ないよな……、とか、ぶつぶつ言ってる。同じ年ですよ、と言ったら、どんな顔をするだろう。
「成人してるかしてないかで、何か違いがあるんですか？」

「成人なら、酒も飲めるし、結婚もできる」
日本とあまり変わらないなぁ。お酒は特に好きじゃないし、結婚はもうしてるんだよな。
こっち（異世界）でも結婚なんかしたら、重婚だよね。……いや、結婚する気なんてないけど、知らないうちにプロポーズされていて、受けてたなんてことになったら厄介だ。
「握手を求めるのが求婚」で、「手を握るのがプロポーズを受けるサイン」なんて風習があったら、間違いなく、知らないうちに結婚しちゃう。成人していないことにしておけば、間違って結婚することはないよね……って、モテてるわけでもないのに、なんの心配してるんだ！
ガタゴトと馬車に揺られ、お尻の痛みも限界だという頃、ローファスさんが前方を指差した。
「あそこがポーション畑だ」
ん？　木々の先に見えるのは、木造の建物1つと、切り立った崖。
畑が広がっているようにはとても見えない。
馬車が、小屋の前に到着した。
「おーい、皆元気か？　新しい仲間を連れてきたぞ、仕事を教えてやってくれ。頼んだぞ！」
ローファスさんが声をかけると、小屋から3人の子供が出てきた。
5歳前後の女の子、8歳くらいの男の子、13歳くらいの男の子。
「えー？　お姉ちゃんが新しい仲間？」

女の子が首を傾げた。
「じゃあな、仕事についてはこの子たちに聞いてくれ。俺は、この先の中級ダンジョンと、その先にある上級ダンジョンの荷物を回収しに行ってくる。3、4日したら、また来るからなー。それまでに、ポーションいっぱい収穫しといてくれよ！」
手を振ってローファスさんは去っていき、残された私の周りに、子供たちが集まってきた。
「あのね、あのね、ポーションはあっちの洞窟で取れるんだよ！」
「スライムを10匹くらい倒すと、1個出てくるんだ！　でもハズレが出ることも多くて、30匹くらい倒して、やーっと1つ手に入るんだよ！」
「あのね、あのね？　スライムをいっぱい倒すと、レベルが上がるのよ！」
は？　スライム？　倒す？　……ポーション畑で収穫って、まさか……。
スライムを倒して、ポーション回収とかって、聞いてないよ⁉
無理だよ、生き物殺すとか！
「えっとね、これで叩いたら倒せるよ。ただ動きが早いから、なかなか難しいんだ」
スライムって、あれでしょ？　つぶらな瞳でぷるんぷるんしてる、かわいらしいやつ。
「お姉ちゃん、早く行こう！　キリカもね、初めのうちは全然倒せなかったんだけど、1週間くらい頑張れば倒せるようになるよ！」

キリカという小さな女の子に引っ張られて、洞窟の中に足を踏み入れた。
中は、ヒカリゴケとかいうもののせいだろうか、壁がうっすらと光っている。目が慣れてくると、意外にもちゃんと周りが見えるくらいには明るかった。
カサカサ。
ひっ！　今の音は……？　そして私の目の端に映った、黒い影は……？
ひゃーっ！「黒い悪魔」っ！　ゴキブリっ⁉
「あっ、早速、スライムが出てきた」
は？　スライム？
「ほら、あそこ！　お姉ちゃん、あれだよ！」
指差す先に、餃子ぐらいの大きさの黒い生き物がいた。黒光りしているそれは、私の知る黒い悪魔と違って、手足のないのっぺりとした形をしている。
ゴ、ゴキブリじゃない。なんだかゆらゆらと、体が液体状に揺れているような気もする。
だけど、なのに、どうして！
カサカサカサッと音を立てて、壁や床や天井を高速移動するのっ⁉　その動きは、まんま、あの黒い悪魔そのものですっ！
「ぎゃーっ、いやぁーっ！」

バシン！
「来ないでー！」
ビタンッ！
近付いてくる黒い悪魔めがけて、次々と、手にしたスリッパもどきを振り下ろした。
「す、すごい、お姉ちゃん！」
「あの素早いスライムを、次々やっつけるなんて！」
素早い？　確かに素早いけれど……。
目の前の物体は、私の知るあの黒い悪魔のように、羽を広げて飛ぶことはない。そしてこの洞窟には、悪魔が逃げたり隠れたりする家具の隙間のようなものがまるっきりないのだ。
つまり……、ずっと私の視界に入ってるのよっ！
うわーっ。バシン！　きゃぁーっ！　バンッ！
はぁ、はぁ、はぁ。助けて……！
「おお、今ので8匹目！」
「そろそろポーションが出るんじゃないかな」
「お姉ちゃん、かっこいい！　畑に入って、まだ5分しか経っていないのに！」
5分で黒い悪魔が8匹も出るって、どこの地獄ですか……。

バシンッ！　手にしたスリッパもどきで、足元に近寄る黒い悪魔を叩き潰す。
「はぁ、はぁ、はぁ……」
スリッパもどきを持ち上げると、黒い悪魔は、黄色い光となって砂のように消え去った。
そして、目の前に、手のひらサイズの小さな瓶が現れた。
「おー、やったじゃん！　ポーションゲット！」
これが、ポーション？
目の前に現れた小瓶をぼんやり見つめる私に、子供たちが叫んだ。
「ああっ、お姉ちゃん、早く手に取らないとポーションが消えちゃうっ！」
「そうだよ、せっかく〝当たり〟だったのに。5秒以内に取らないとなくなるぞ！」
「モンスターをやっつけた本人しか取れないんだよ、急いで、急いで！」
あ、え？　消える？　当たり？　モンスター？
言われるがままに、急いで小瓶に手を伸ばした。
ああ、そうだった。黒い悪魔ことゴキブリそっくりの動きをする生き物は、「スライム」という名前のモンスターだった。
私、異世界に来ちゃったんだっけ。
カサカサ。ひぎゃーっ！　また黒い悪魔がっ！　バシンッ！

カサカサカサ。うぎゃーっ、また来た！
聞いてない！　聞いてないよぉ！
黒い悪魔が出るなんて、聞いてなかったんだから！　ローファスさんのバカァッ！

ポーションを手に、いったん洞窟の外に出る。
無理。あんなにわさわさ黒い悪魔が出る場所にいるなんて、精神的に持たないよっ。
はーっ。ため息を吐いて、掴んだポーションを見る。
ポーションが１００円。１日パンを３つ食べるとしたら、あと２つはポーションが必要だ。
主人の言葉が、頭に響く。「楽な仕事なんてないんだよ。お前は甘いんだ！」……。
……くっ。黒い悪魔がなんだ。怪我をするわけでも、死ぬわけでもない。
身寄りのない女が娼館に身を預けなくても食べていけるんなら……。
ごくんとつばを飲み込み、黒い悪魔の待つ地獄（洞窟）へと再び足を踏み入れる。
「ぎゃーっ！」
バシ、ビシッ。
薄目にしたって見えるんだけど、目を見開く勇気が持てず、薄目で洞窟の中を見る。
「ぎゃーっ！」

「お姉ちゃん、本当にすごいよ。S級冒険者のローファスさんでも、スライム相手にこんなに戦えないよ」
「ローファスさんなら1匹ずつ潰さずに洞窟ごとドカンってできるよっ」
「でもそれだとポーションもドカンだから役に立たないよ」
「ローファスさんをバカにするなっ！」
「バカにしてない。本当のことだもん。スライム相手なら絶対、ローファスさんよりお姉ちゃんの方がすごいの！」
「そんなことないよっ！　ローファスさんなら」
ん？　子供たちが口喧嘩を始めた？　原因は私？
「カーツ、キリカ」
一番年上の13歳くらいの男の子が、口喧嘩を始めた子供たちの名前を強い口調で呼んだ。
なるほど、赤毛のそばかすの浮いた8歳くらいの男の子が「カーツ」ね。ローファスさんはすごいって言っていた子だ。ふわふわの薄い茶色の髪の毛の、5歳くらいの女の子が「キリカ」。私のことをすごいすごいと褒めてくれていた子だ。
「「ごめんなさい……」」
2人がしゅんっと頭を下げた。

「ダンジョン内での喧嘩は厳禁。命に関わる。今度から気を付けるんだぞ」
「ダンジョン？　命？」
え？　このポーション畑って、命に関わるようなことあるの？
「もしかしてお姉さんは、冒険者登録をしたばかり？　だからここに来たの？」
カーツ君に尋ねられ、こくんと頷く。
年長者の男の子がカーツ君の肩を叩いた。
「カーツ」
「ああ……、そうだった。ダンジョン内では、冒険者への詮索禁止だった」
ん？　また言ったよ？
「ダンジョン？」
この洞窟が？　体育館くらいの大きさの、空間が広がっているだけの洞窟が、ダンジョン？
「小さいけどダンジョンなんだよ、だからね、スライムが出てくるの」
とキリカちゃんが教えてくれる。
「えいっ！」
パシン。と、キリカちゃんが黒い悪魔にスリッパもどきを振り下ろした。
「あーん、逃げられた。今度こそ！」

5歳くらいの女の子が、一心不乱に黒い悪魔をやっつけようとしている。ううう。
おばちゃんが頑張るよ！　おばちゃんに任せときなっ！
悲鳴を上げている場合じゃないっ。子供に悪魔退治を任せるほど、私は鬼じゃないからね！
バシッ、ビシッ、ババーン。
「はっ、そこだ！　逃がすか！」
「うおう、なんかお姉ちゃんのスピード速くなった？」
「すごい、やっぱり、お姉ちゃんすごいのっ！」
時々出てくる小瓶を回収しつつ、黒い悪魔を退治しまくった。
「そろそろ時間だ。出よう」
と、リーダーなのかな？　年長の子が、口を開いた。
「えー、でも、私、まだ2つしか取れてない……」
キリカちゃんが不満を口にする。
「キリカ。『ダンジョンルール』だ」
「分かった。体力温存して切り上げること。無理はしちゃダメ」
「そうだ。いい子だ。じゃぁ出るよ」
リーダーの言葉に皆が外に出た。

「ダンジョン内では、自己紹介もできませんでしたね。僕はブライス。レベルはもうすぐ10になります」
年長の少年が洞窟を出たとたんに話しかけてきた。
明るいところで見るブライス君は輝いている。金色の髪が光を受けてキラキラです。そして、恐ろしいくらいのイケメン。いや、美少年です。ま、眩しいっ！
「あ、はじめまして。ユーリです。今日、冒険者登録をしたばかりで、レベルは1です」
「え？　おねーちゃんレベル1なの？　キリカはレベル3だよ」
5歳くらいの子ですらレベル3なのね。そりゃ、この年齢でレベル1だったら驚かれるか。
「変わってますね。普通に生活していれば、10歳になる頃にはレベル2や3にはなっているはずなのに。お姉さんの年でレベル1なんて」
ブライス君が首を傾げた。
「だったら、普通の生活をしてなかったんだろ？　な、姉ちゃん。その年から冒険者目指すっていうのだって相当珍しいし。俺はカーツ。3歳の頃から冒険者目指してる。いつか、ローファスさんのようなS級冒険者になるのが夢なんだ」
目をキラキラさせてローファスさんの名前を口にするカーツ君。
もしかしてローファスさんは、人から憧れられるような人だったりするのかな？

「えー、普通じゃない生活ってなに？　キリカにはわかんないよ？　お姉ちゃん教えて」
「バカっ。病気でずっとベッドの上にいたとか、お嬢様で働かなくてよかったけど家が没落しちゃったとか、人に言いたくない事情だってあるかもしれないだろう？　聞くなよっ」
カーツ君がキリカちゃんの口を慌てて塞いだ。
なるほど。普通じゃない生活というのは、自分で何もしない……働かない生活ってことか。
専業主婦だった10年間の自分のことを言われたようで、少しだけ傷ついた。
「あの、私、違う国から来たの。私の住んでいた国ではレベルはなくて、ダンジョンもモンスターも何もなくて冒険者もいなかった。だから、いろいろ教えてね」
国というか世界が違うんだけどね。
「え？　そうなんだ！　すごーい！　遠くから来たんだね！」
「じゃぁ姉ちゃんは、冒険者に憧れてこの国に来たのか？」
「キリカ、カーツ、話は小屋に帰ってからすればいい。いろいろ教えてあげるのが先だ」
と、ブライス君がダンジョンで手に入れた瓶を指差した。
がむしゃらに黒い悪魔を叩きまくり、現れた瓶は回収し忘れてはいないと思うけれど。
「本当だ。当たりポーションの見分け方も知らないんだ」
カーツ君が、足元に無造作に置いた瓶を眺めた。

「キリカが教えてあげる！　ユーリお姉ちゃん、これがポーション」
瓶を1つ持ち上げて、軽く横に振った。黄色い液体がゆらゆらと揺れる。
「これはハズレよ」
次に持ち上げた瓶の中身は黒かった。これは見分けやすい。
「これもハズレよ。ポーションじゃないの」
次にキリカちゃんが持ち上げた瓶の中身は、黄色いことは黄色いけれどずいぶん薄い色だ。
しゃがみ込んで、教えられた通りに他の瓶の中も確認していく。
黄色い。これがポーションね。黒、黒、透明、薄い黄色、ポーション。ハズレポーションはいろいろと種類があるんだね。ポーションの選別をしてキリカちゃんに確認する。
「これでいいかな？」
「うん。そうよ！」
キリカちゃんから合格をもらった。ポーションが5つ。ハズレが12。
「ハズレはどうしてハズレなの？　毒？」
「毒ではないけれど、飲んでも回復効果はないんですよ」
すぐにブライス君が答えてくれた。
そっか。回復効果がないのか。ふと、賞味期限切れって言葉が浮かんだ。

……賞味期限、切れてたって私、平気なタイプなんだよなぁ。
薄い黄色の瓶を手に取り、カポっと蓋を開けた。
「あー、ユーリさん、何してるんですかっ！」
口元に瓶を運んだらブライス君に止められた。
「毒じゃないけど、すっごく不味いんだぞ。吐くぞ！　飲んじゃダメだ！」
カーツ君の顔が青ざめてます。吐くほど不味い？
ブライス君が私の手から瓶を取り上げて地面に落とした。瓶が倒れ中身がこぼれる。瓶の中身がなくなったとたん、瓶が黄色く光り、砂になって消えた。
あ！　瓶だけ利用することもできないのか。ゴミが増えないのはいいけど……。
ハズレポーションは本当にハズレなんだ。何かに使えるかもしれないから、瓶だけでも取っておいてもいいかなぁと思ったけど。
ん？　あれ？　ふと、よく知っている匂いを感じた。美味しそうな匂い。
「次は小屋の説明が必要だね。早く戻って食事をしましょう」
ブライス君がにこっと笑って、小屋に向かって歩き出した。
小屋は個室が10に、ダイニングキッチンと居間でできている。

「こっちがキリカの部屋。お姉ちゃんどの部屋使う？　隣、空いてるよ」
「キリカちゃんの隣の部屋にしようかな」
「うんとね、じゃぁ、扉のそこにカードを近付けて『登録』って言うのよ。そうしたらユーリお姉ちゃんの部屋になるの。お姉ちゃん以外の人は許可がないと入れないのよ」
カード？
「カードって、このギルドで登録した時のこれ？」
キリカちゃんが頷いたので、扉にある小さな出っ張りにカードを近付けて『登録』と言ってみた。ホテルのカードキーみたいなものなのかな？
「収穫したポーションは月に1度回収されます。それまでは部屋に保管してください。他の人間は入れないので安全です」
ブライス君の言葉に首を傾げる。安全？　この子たちが盗みを働くとは思えないけど？
「この小屋も、中のものも、全部ローファスさんが用意してくれたんだよっ！　昔は小屋がなかったから、野宿だったんだって」
カーツ君がまた目をキラキラさせてローファスさんの話を始めた。
へー。すごいなぁ。小屋といっても、粗末なあばら家ではない。ログハウスのようなしっかりした建物だ。部屋数もかなりある。

「ユーリさんは、どこまで冒険者のことを知ってますか？」
ブライス君の問いに「全然」だと答える。
「お金のある人間は冒険者になるために、冒険者養成学校に通います。僕たちのようにお金のない人間は、ポーション畑や他の仕事でお金を稼ぎながら冒険者としての心得を学び、レベルを上げます」
へぇ。冒険者養成学校なんてものもあるんだ。
ここにいるキリカちゃんやカーツ君やブライス君は、お金のない子供たちってことなのか。
「このダンジョンは、貧しい子供たちがレベルを上げるために来る場所です。そして同時に、お金を稼ぐためにポーションを収穫する場所なんです。野宿や貧しい食事にも耐えられないようなら冒険者としては生きていけない。だから、野宿でも平気なんです」
うっ。そうなの？　野宿か……。
冒険者としてこの先生きていくならば、野宿の覚悟も必要なのか。
「とはいえ、野宿の生活では、せっかく収穫したポーションを狙われ、奪われます。襲われて傷つけられることもあって、それでは冒険者になる前に生きていくことすらできない。だからローファスさんは、未来の冒険者たちのために、この小屋を建ててくれたんです」
あ。そういうことか！　他の人が入れなくて安全な部屋というのは、子供同士でポーション

を盗むからではなくて、外敵を防ぐためか。確かに、子供だけで生活していたら、危険きわまりない。ローファスさんは守りたかったんだね。子供たちを！

いい人だ。ローファスさん、めっちゃいい人だ。きっと、結婚よりも優先することが多すぎるタイプ。いつも誰かのためにお金を使ってすっからかん……とか、そういうタイプだ。

「それに、下手な安宿よりよっぽどいいベッドを使っているから、居心地はいいですよ。僕も、ここを出ていくのをつらいと思っているくらいです」

「え？　ブライス君、出ていく、って？」

「はい。レベルが10になると、『冒険者見習い』を卒業し、『冒険者』として畑ではないダンジョンに入れるようになります。だから、ここは卒業です。お姉さんが来てくれてよかった。チビたち2人を残していくのは少し不安だったんです。いいか、カーツ、キリカ。ダンジョンルールについては、お前たちがしっかりユーリさんに教えてあげるんだぞ？」

え？　うそっ！　ブライス君、いなくなっちゃうの？

「うん！　キリカ、お姉ちゃんにちゃんと教えてあげるんだ！」

健気（けなげ）に言いながらも、キリカちゃんは泣きそうな顔になった。そうか……一緒に暮らしてきたお兄ちゃん的存在がいなくなるんだもん、……寂しいよね。

まだ小さくて、親元を離れて暮らしているだけでも寂しいだろうに。

「ご飯食べようぜ！　腹減った！」
しんみりした雰囲気を変えようとしたのか、カーツ君が大きな声を出した。
「これも、ローファスさんが用意してくれたんだ。ここにポーションを入れると、パンかジャガイモが出てくるんだ。だから、食べるものに困らない！」
キッチンの奥に食器棚のような大きな箱が置いてある。小さな丸い穴が目線の高さにあり、下の方に四角い穴が開いている。小さな穴にカーツ君がポーションの瓶を1つ入れて「パン」と言うと、下の穴から、パンがころんと出てきた。まるで自動販売機だ！　すごい！
ブライス君も、同じようにしてパンを出した。
「キリカはどうする？」
ブライス君の言葉に、キリカちゃんは「うーん」と考えてから、首を横に振った。
「今日は2個しかポーションを取れなかったから、我慢する！」
え？　小さい子が食べたいのを我慢？　ご飯を我慢するだなんて……？
「……食べないと、大きくなれないよ？　そうだ、私、5つ取れたから、私が……」
「ダメだ！」
キリカちゃんの分のパンを出そうと、ポーションを穴に入れようとしたら、止められた。3人の目が、こちらに向いている。

「ダンジョンルール。人に助けてもらえると思うな、助けを求めるな」
「な、何それ……？　小さい子がお腹を空かせているのを助けちゃダメなの？」
全員がテーブルに座った。私も、自分用に出したパンを1つ持って、席に座る。
「小さくても、僕たちは冒険者です」
「そして、ここは冒険者としての心得を学び、訓練する場所」
「あのね、ユーリお姉ちゃん。ダンジョンでモンスターと遭って怪我をしちゃった時に、別の冒険者が来ても『助けてもらおう』って考えちゃダメなんだって。だって、助けてくれようとした人が死んじゃうかもしれないんだよ？」
ハッと息を飲む。ローファスさんが携えていた剣を思い出す。
そうだ。ここは異世界だ。剣と魔法の世界。日本よりもずっと、死が近くにある場所なのだ。
「だから、助けてもらおうとしちゃダメだし、助けようとしてもダメなの」
キリカちゃんは我慢するし、我慢しているキリカちゃんを助けないように、私も我慢しなくちゃいけないってこと？
それは、冒険者としての訓練。ダンジョンで、同情心から自らも命を落とすことがないように。
そういえば、洞窟の中でブライス君が、「ダンジョンルール」と何度か言っていた。冒険者

へあれこれと聞くことを禁止するのも、相手のことを知りすぎて親しくなると、いざという時に助けたくなってしまうから？

ぎゅっと両目を瞑る。

「だけど……、もし、怪我や病気で何日もポーションを収穫できなかったらどうするの？」

一食抜くくらいなら平気かもしれない。

「僕たちは冒険者だからね。だから、働いて食べる。働けなくなれば、冒険者をやめる。働けるなら、取引する」

「取引？」

「例えばこんな風に。【契約　ユーリにポーション1つを貸し与える　等価返済】。これで、ユーリさんに返してもらうことを条件に、ポーションを1つ渡すことができる。【契約成立】と相手が言えば成立。魔法で拘束されるからね、契約を破棄するとそれなりのペナルティが課せられる」

そうなんだ。取引、契約か。……っていうことは、もしかして？

「ダンジョンでも使えるの？」

「もちろん。レベル1のユーリさんがD級モンスターに襲われたら危険だけど、S級冒険者のローファスさんなら、くしゃみをするより簡単にやっつけられるからね。だから【契約　ダン

ジョンからの脱出支援　金貨5枚】とでも言えば助けてもらえる」
そうなんだ。よかった。
誰にも助けを求められないとか、誰も助けないとか、そんな世界ではないんだ。
「契約を持ちかけられた方は、自分の能力で達成できる事柄で、報酬にも納得すれば『契約成立』を宣言すればいい」
うん。逆にいいシステムなのかもしれない。相手が死ぬかもしれないのに「助けて」って言うよりは、相手の能力を見込んで「お金を払うから助けて」って言う方が頼みやすい。
……ブライス君がキリカちゃんに「どうする？」と尋ねたのは、契約するかしないかどうするかっていう意味も含めて聞いたのかな？
キリカちゃんは「冒険者」として、一食我慢することを選んだってことだ。
うーん、でもなぁ。まだ幼児と言えるような幼子が食べるのを我慢してるのに、目の前で自分だけ食べるなんて……。おばちゃん、修行が足りなくて、まだ無理だよっ！　いくら冒険者になるための訓練って言われたって……。
部屋に戻って、ポーションの瓶を4つ持ってきてパンと交換し、皆に1個ずつ配った。
「あのね、私の故郷では『引っ越し蕎麦』っていう習慣があったの。『よろしくお願いします』って挨拶を兼ねて、前から暮らしていた人たちにお蕎麦を配るの。蕎麦はないからパンになっ

ちゃったけど、……これからよろしくお願いします！　よろしくしてくれるなら、パンを受け取ってください。もし、私がここにいるのがいやだったら、受け取らなくていいですっ！」
ペコリと頭を下げる。明日からはもうちょっと頑張ってダンジョンルールに従えるように努力するけど、でも、今日は無理。なので、ごめんね。「日本ルール」というか、日本の習慣「引っ越し蕎麦」の異世界改変バージョンを、使わせてもらいますっ！
「ねぇ、蕎麦ってなあに？」
「よく分かんねぇけど、故郷の習慣なら、受け取らないわけにはいかないな」
「こちらこそ、よろしくお願いしますっ」
すると3人とも、パンを受け取ってくれた。
ほっ。よかった。でも、毎日こういうわけにはいかないよね。皆が、最低でも、お腹いっぱい食べられるだけのポーションを収穫する手立てはないものかな。
パンを食べ終わり、登録した部屋に移動する。
今日から、ここが私の部屋なんだなぁ。明日からも黒い悪魔退治か……。
黒い悪魔……。日本なら叩き潰す以外に「スプレー噴射」という方法もあった。でもここにスプレーはないから、無理だよね。毒を仕掛けて、巣ごと退治する方法もあったな。あ！　そうだ！　ダメで元々だ、明日チャレンジしてみよう。……とか、いろいろ考えているうちに、

眠気に襲われて、瞼が下りてきた。

ブライス君の言った通り、なかなか柔らかくていいベッドだったので、異世界生活1日目は、あっという間に夢の中だった。

ハズレポーションが醤油だったので料理することにしました

試し読みはここまで

書籍情報はこちら
https://books.tugikuru.jp/detail_potion.html

書籍の購入はこちら
https://www.amazon.co.jp/dp/4797397691/

富士とまと
Tomato Fuji
村上ゆいち Ill.
Yuichi Murakami

ツギクルブックス